

知事記者会見（平成24年11月16日）

●知事発表

（1）衆議院の解散について

時間：16：00～16：32

場所：プレゼン室

（幹事社）

今日は知事が臨時で記者会見をされるということなので、よろしくお願いします。

（知事）

はい、臨時というよりも、こちらからというよりも、衆議院の解散、今、先ほど解散いたしましたので、感想というかちょっと述べさせていただきます。

いずれ今後の県政運営に関しましても、これから予算編成時期ですので、様々な影響も考えられます。そういう中で、今日の解散を受けて、私なりに感想を述べさせていただきます。

まず、解散については、ほんの数日前までは、たぶん今年中の解散はないだろうという、そういう雰囲気でありましたけれども、突然の解散ということになりました。ただ、これまでよく振り返ってみますとですね、やはり、野田総理はあのような方でありますので、極めてやはり信義を重んじられてきている方だと思います。そして、大変正直な方であります。そういう意味で、やはり近いうちという、そういう言葉を発した以上はですね、これを全く反古にするということはないのではないのかと若干そういう私も考えておりました。ただ、たぶんこの会期末の22日の解散が妥当だろうと思ってましたけれども、16日ということで、これが1週間ほど早まったわけであります。

そして、東京都知事選挙と同じ日に衆議院議員選挙をするという、たぶんこれはですね、22日解散で12月22日、あるいは12月24日の投票日という、そういう話も出てましたけれども、東京都で1週間に2回選挙をやるというのは、これはなかなかやはり、東京都の選管は大変なようですけれども、国民感情からしてですね、非常に無駄なお金を使うんじゃないか、そういうイメージもございました。そういうことで、やはり16日に照準を合わせた4日公示ということになったと思います、12月4日。

さて、これに対する感想であります。

まず、先ほど言ったとおり、総理はやはり自分の言った言葉に対して、少なくとも信義は重んじたということで、私は評価をいたしたいと思います。そしてまた、私自身もできるだけ早く解散して、すっきりした形で国民のいわゆる信を得た上で、この後のいろいろな形で錯綜しているというか、こんがらがっている国政を前に進めていきたいということは前から言っておりましたので、私はこれについては評価します。

もう一つ、我々県政を預かる者として、解散が来年の、いわゆる来年度予算ができた後

の解散であれば別にいたしまして、来年度予算ができる前の解散、即ち来年の3月末までのいわゆる通常国会会期中の解散、あるいは解散は今年中、12月中で、年をまたいで1月以降の選挙、これいずれにいたしましてもですね、そういう形になりますと、国の予算編成がですね、相当遅れてくるということは確かであります。まず、現在の状況で見ますと、これもやはり遅れます。遅れますけれども、少なくとも12月16日に大勢を決するわけでありますので、それぞれの政党が、様々な形で政権公約等を出してくるであります。それによってどのような方向の政策が重視されるのかということが相当見えてきます。細かい数字は、やはり12月末までは出てこないと思いますけれども、それによって我々もその腹積もりで当初予算の準備を進めることができます。ですから、16日から約十日間の間で相当やはり新しい政権は、そこら辺のまずは来年度予算に対する方向性は出してくるのではないかと思います。ですから今の時期の解散であれば、そして12月16日の投票であれば、それは、そこまでは間に合うと。しかし、それでも年度内の計数整理といえますか、数字を全部固めるということは間に合わないと思います。これは年越すと思っています。

ただ、もう一つのパターン、今年中に解散して、年明けに選挙になりますとですね、これは、それからまた一から、一からといいますか、予算が、新しい政権がもしできると、全く今の枠組みの政権だとまた別ですけども、なかなかそうはならないだろうということからすると、1月から2月にかけてもう一回やり直しであります。そうすると、また遅れてくる。さらにこれがですね、来年度予算の大体計数整理、数字が完全に揃った後の通常国会中の解散でありますと、これはさらに遅れてきます。

そうしますと、もう相当後になると。5月、6月にならないと予算が決まらないと。今の状態であれば、通常はですね12月の22、3（日）が（国の来年度当初予算案の）最終内示であります。これが例えば年明けになったとして、これ財務省も各省庁大変でしょうけれども、正月返上で予算編成をしますとですね、暫定予算を組まなきゃならないとしても、相当これは短期間にある程度その本予算が組むまではそんなに時間がかからないと思います。そうしますと景気対策も含めて、我々としてはこれについてはある程度何ていいますか、これがですね、6月なんかになりますとですね、もう都道府県にしてみれば、いろんなことについては8月、9月からでないといけないのであります。そういうことからすると、予算の仕組み全体を見通すと、今が最終チャンスだということでありませう。そういう意味で野田総理もそこら辺まで含めて頭の中にあっただうかとは別に、まずこれは私としては解散するとすれば今の段階が一番影響が少ない。逆に解散しないでするずるといいますと、全くいろんなものが決まりませんので、そういう意味では、若干のタイムラグがあってもすっきりした形でこれから国政が進むということが期待できるわけでありませう。

もう一つ、野田さんが今回、野田総理が解散した背景は、確かに自民党、公明党との近いといういわゆる消費税の法案の成立を条件としたそういう、確約かどうかわかりませうけれども、ある程度の一定の約束事があったということであったようでありませう、いずれにしてもかなり党内事情によってこれを急いだというふうにとることができるんじゃないかと思います。いわゆる民主党内、与党内が解散についてかなり否定的でありませうので、このままでいくと、いわゆる解散権が封じられるようなそういう形になるという、

そうしますとあの方はやはり自分としても納得がいかないということで、これだけ電撃的に解散を決意したと。今までにちょっとない事例であります。そういうことで、かなり対野党対策というよりも、与党内での何と申しますか、いろんな意見の違いからこの解散を早めざるを得なかったというふうに捉えるのが一般的ではないかと思えます。

もう一つ、この後であります。様々な第三極も出て非常に選挙が混沌とすると思えます。この後の選挙に対して、特に私が考えるのは、これまでのように一般的な期待は私は今、言うような選挙ではないと思えます。通常、一般的に国政選挙であれば、新しい政権には経済対策をしっかりして、国民の格差是正、あるいは福祉・医療政策と、こういうことを言いますけども、今回はそういう言い方の選挙ではないのではないかと。

一つは、かなり国際情勢も含めて、国の政治の全体の方向性が議論されてきているという一つの流れもございます。もう一つは、かなりやはり日本のこの財政事情、あるいは日本の経済力の低下に伴って、政治がすべて様々な形で国民の期待に応えることが、財政的に難しいという状況の中で、かなり国民にも覚悟をしてもらって選択をしてくださいという、そういう位置付けの選挙ではないかと思えます。これはかなり、場合によってはきつい形でやはり国の立て直しのために、今までのような、何ていいますか、国民の要望に応えるのが政治というよりは、まずは日本の国が、今後持続的に存続するための相当な基本のところをきっちりやる政治、そのためには少々国民には、これまで以上に、場合によっては痛みを伴うことがあるという、そういう一つの裏読みするとそういう形の主張をしている方々もいらっしゃいます。あるいは、TPPの問題でも、確かにTPPの問題そのものはいろんな複雑な要素がございますが、これが争点になるかならないかわかりませんが、やはり単純な形でこういうものを全て論じるものでもないし、あるいは様々なその地方自治の、本来の地方自治に対するその形についても場合によっては相当選択、その、今後の動向によっては考え方が、あるいは仕組みの変化が見られる可能性も出てきます。そういうことで、やはり私は、確かに、しかし一方で、非常にその今の民主党から離党者が出たり、あるいは第三極が様々な形での基本的な政策のすり合わせは後にしても、まずは選挙を勝つという、そういう状況になれば、またぞろですね、いろんな面で様々な形で政権は、何らかの形での政権の形はいろんな形でなったとしてもですね、また相当ゴチャゴチャしてくる可能性もございます。私はですから、やはり私の個人で、今度は個人的考えです。政党より、やはり人を選ぶ選挙になるのかなと。もう一回原点に戻ると、政党よりもやはりその人の人格やその方の誠実さというものがもう一回問われるのではないのかなと。でなければですね、そう簡単に政党をコロッと変わるという、こういう流れが普通に一般的にぞろぞろ出てくるという、そういう中で、なかなかその政党そのものを信用できなくなってきている、そういう感じがします。ですから私は少なくとも個人的には政党よりもその人の人格や、その人の人となりというものが、これは相当今度はね大事になる。一方でものすごい体制選択みたいな話の中でも、やはりそこはますます大事になってくるのかなと思って、ややそんな感じがします。

それから、望ましくは、非常に最近、政治の言葉が汚くなっています。非常に汚い。あるいは、その何ですか、ITのいろんな情報化によってですね、面と向かってしゃべれないものを、いわゆる情報化ということで、ウェブの中で非常に汚く人を罵るという、面と向かってにこにこ笑って罵るという、そういう非常に汚い政治になってます。言葉も汚い。

乱暴になっている。これはやはりですね、政治を乱す根幹であります。できるだけやはり人をけなすのではなくて、主義主張と自分の信念をきっちり出して、それで選択していただくような選挙になっていただきたいなど、これは希望であります。

また、言葉が汚くなる、そういう形で面と向かってはしゃべれないものをウェブの中でごちゃごちゃあげつらうというのは、これはやはり政治の品格を落とすわけであります。全体的に政治のパワーが逆になります。ですから、特にその若い方々の政治家の方々には、確かにそういうものを使いこなせますけども、これは気をつけていただきたいと、そう思っています。やはりせつかくでありますから、やはり、きれいなというわけではなく普通の言葉で、やはりきちっとした自分の考えを貫いて、そしてあまりあっちこっちにブレずに、でないとですね、国民は何を選択していいのかわからない。やはりそういう形でいろんな意味で今回、今までの単に政策論争だけではなくて、政治家の本来の政治家のあり方はどうなのかという、そういう選挙にもなります。ですから、これはいろいろな面で、日本の一つの戦後の民主主義の大きな曲がり角の選挙であって、またこの後日本がどうなるのかという大事な選挙であると思います。ということで、最後に一般論として知事から「できるだけ皆さん、きちっと投票での行動を示していただきたい。」と、そういうことであります。

以上であります。

(幹事社)

各社さんから質問があればお願いします。

(記者)

人格で選ぶという話もありましたけれども、選挙戦でどんな論戦を期待されますか。

(知事)

あの、やはり今ですね、特にこの第三極と言われるけど、これは、この力量は未知数ですけれども、第三極と言われる橋下さんを含めてこの方々、中にはちょっとですねどうかと思うのもありますけども、基本的にかなり大きな政治行政の仕組みの変更といいますか、これを論じてます。これはやはり今までになかったことですね。単なる地方分権という、あるいは今まではですね地域主権の推進だとか、地方分権の拡充だとか拡大だとか、そういう言葉でありましたけれども、第三極の方々については、例えば橋下さんについては消費税を全部地方交付税化に、地方交付税を消費税に置き換えて全く地方税にするという、そういう具体的な形が出てきてます。また、これはあの、非常に議論があるところですけども、今の国際情勢からして、例えば石原慎太郎さんは、自衛隊を倍にするという、まあ防衛力の倍という、そういうものすごい変革です、これね。ですから、そういう大きなものが提起されてきています。これに対してですね、たぶんこういうのは今までになかったんですね、こういうものは。

いわゆる55年体制の日米安保条約の、皆さん方知らないでしょうけども、あの頃はまさにこういう議論でありましたが、それからはほとんど与野党ともあまり争点というか、基本的には福祉の向上だとか、その経済の発展だとかということ、誰でもまさか福祉を停

滞させる、福祉を切り下げるなんていう人はいませんからね、そういうその何と申しますか非常にいい話だけでしたけども、ある意味ではこういうものというのはですね、場合によっては相当なその枠組みの変化ですので、それは国民もそれを覚悟してそれは臨まなきゃならない、そういうことが今回提起されているという、そういう選挙なんですよ。ですから、そこら辺がですね非常に違ってきたのかなと思いますね、今回。

もう一つはやはり、官僚主導から政治主導と言って現政権やりましたけども、結局、最も官僚主導になってしまったというのは、官僚を・・・と私が言うのもなんですけども、私は官僚じゃないけども、県庁の職員やりましたけども、官僚を使いこなすということは、その上に行くリーダーシップと一定の基礎的素養が必要であります。リーダーシップと一定の基礎的素養と腹がなければ官僚は使いこなせません。口だけで政治主導という形を言ってもどうしようもないと。これも一つの大きな今までやって、その何ていいますかよく見えた点であります。ですから、そういう意味では橋下さんとか石原さんは非常に強い言い方してますけども、ただ、あれで全てが良くいくというわけでもないという、非常にそういう意味ではね、今までと違ってるといえる感じですね。

(記者)

この民主党政権のこの3年余りをどのようにご覧になって、秋田県では小選挙区で13人ほど今のところ出馬を予定されていますけれども、秋田の課題と結びつけてどんなことを期待されますか。

(知事)

いずれにしても、私どもは、これはあの何ていいますか、細かいことでね、財源をよこせだとか高速道路を作れとかそういう話、そういう話は小さい話だ、本当にね。いわゆるですね、日本の国をどうするのかという議論の中で、やはりこの秋田の地というのは、私としてはですね、これ日本の中で存在が必要な県だと思ってます。そういう意味でですね、やはり、この前維新の会の方にもお話しましたが、日本は都市だけではないよと。やはりこの秋田のようなところがあって初めて都市も存続ができるという、そういうスタンスでやはり日本全体の、今までのような均衡ある地方の発展、そういう平準な言葉じゃなくてですね、やはり日本がこれから存続していくために、エネルギー県である秋田、あるいは食料生産県である秋田、あるいは環境をきちっと守って、それで様々な形で都市に寄与している秋田という、こういう点をですね、やはり全国的にこういうものを大きな政治の一つの国政の中で、ここをですねきちっととらまえて、これに対するその大きな骨太の政策というものを打ち出していきたいというのが知事としては願いです。

どうも、どうしても今まではね、細かいその事業レベルのことでした。じゃなくてですね、そういう基本的な国のあり方として、やはりエネルギー基地は地方に求めると。とすると、それに対する大きな政策の流れ、あるいは食料基地としてやるのであれば、やはりそれに対するきちっとした、単にその何とか補償だとかそういう話じゃなくて、国として大きな柱としてそれを体制的にも財政的にも、どう扱うのかという、そういうもうちょっと大きな流れの中で位置付けて欲しいなと思ってますね、はい。

(記者)

もう一点です。特定の候補の応援に知事としてかかるというか、そういうお考えはありますか。

(知事)

私も知事選挙を控えています。ただ、基本的に秋田市長時代から私いつも言ってますけども、少なくとも公人になってから、今回、議会の最中ですのでね、その時間的余裕もないし、特定の候補に対して公人になってからおおっぴらに、おおっぴらにというかそういう形では、時間的にも不可能であります。ただ、先ほど言ったとおり、やはりそれぞれの候補に昔からの仲のいい人もいますし、それは心情的に応援したいということもございます。あるいは、やはり私の後援会と地区によっては候補者の後援会がほとんど重なっているところは、これ、別に自動的に私の地区後援会がその候補者をかなり一生懸命やるという、そういうパターンはあります。これは任せております、基本的に。これはあの、かなり重なる状況が出てきてます、やはり。

(記者)

わかりました。

(記者)

改めて伺いますんですが、一言二言で表わすとしたら、今回の選挙はどういう選挙になると思っているのか、それで、もし違うのであれば、どういう選挙になって欲しいか簡潔にお願いします。

(知事)

絶対過半数は取る党がないのではないかと思います。ですから、この後はやはりその枠組みはどうするのかということでもありますので、何ていったらいいのかな、難しいな、何と言ったらいいんでしょうね……。何だ、ルービックキューブみたいなガチャガチャしたこういう感じだろうな、組み合わせね、どういう組み合わせがいいのかね。ただ、古い言葉でいうと、あれじゃないですか。体制の変革がかかる選挙じゃないですか。昔はあの、55年体制の打破という話があった、ややそれに似た、戦後における体制変革のきっかけとなる選挙っていうかね、そういう感じしますね、今回ね。これですね、やはり第三極からあれだけのものを突きつけられると、既存の政党もね、これ触れないわけにいかない。今までのようなたぶんね、政権公約でズラッと上からやわらかい言葉で、国民が何とかとそんなやわらかいその福祉だとかそういう言葉はね、前に出てこない選挙だと思うんですよ。主要な政党は。そういうもの出してもね、ピンとこない、国民。ですからそこら辺が非常にね、やはり第三極がどのぐらいこれから、今日どうなったのかわかりませんが、相当第三極のね、動きをとらまえるね、そういうことを意識した形で各政党が出してくると思いますのでね、そこら辺はかなりどうなんでしょうね、開けてみないとわかりませんが、どうしても我々のそこら辺が一番の、今までのように対自民党とどっかの野党との選挙というよりも、第三極が今までに全くない切り口で入ってきてますので、どうして

もそこが何と申しますかどうなるのかというのは我々としては興味あるところですね。一般の方がそこまでいくかどうか、一般の方はどちらかというところとやっぱり人気という話になるでしょうけども、私は是非ともそこはね、第三極を否定するものではないけど、ちゃんと見てほしい。やはり、例えば自衛隊を倍にすると、防衛力を倍にするとはどういうことなのかという、そこら辺まで加味しないとね、地方交付税がなくなるということがどういうことかという、ですから、今までの選挙は、まあ長くなるんであとやめますけども、今まではね全くその政策見ないでポンと入れて、そして文句言ったって始まらないんですよ。だから今度はね、後で文句言わないように、ちゃんと見て、少なくとも、但しプラス人柄、そういうことだと思いますね。まあ何ていう、どう言えばいいのかな、まああの、解散はね、やっぱりあれでしょうな、あの・・・追い込まれ解散ではないと思うんだ、これね。野田さんのね、義憤とかね、男気の、私はあの人、男気あると思うんですね。私は野田さんの信念、野田さんの人柄解散だと思うな。いやいや、あの人やっぱりね、何となくね、二、三日前から、何か顔色が良くなったよね。にこにこしてきたもんね。だからそれは、いかに吹っ切れたかということで、私は総理大臣としては、あの方は非常に今回評価しますね。ただ、選挙になって終わって、民主党の中で居場所が出てくるのかなという。そういうのがありますけれども、なかなか私、戦後にしてあの方はね、非常にいい骨の座った方だと思って、あの方はまだまだ総理やってもいいぐらいの人だと思いますね。あのあれですよ、ほめ殺しじゃないですよ、本当に。

(記者)

ありがとうございました。

(知事)

すみません、なかなかいい言葉がなくて。

(幹事社)

時間もなくなってきましたので、最後に質問ある社ありますか。

(記者)

先ほど民主党政権ということだったんですが、この3年4カ月、そこで民主党政権になって、これが良かったというところと、ここが悪かったというところをそれぞれ端的に挙げていただきたいなと思います。

(知事)

民主党政権でですね、これはあの、裏腹な面もありますけれども、一般にやはり新しい政治家の方が出てきて、国会議員が出てきて、この方々はやはりある意味では何ていいますか接しやすい。非常に国民からして割とその重々しく振る舞いませんで、個人個人からするとそれぞれ我々としては接しやすい、あまり手続をあだこうだと言わない。ただ、全体として集団として考えた場合に、やはり民主党政権は、これは浅いせいかもしれませんが、政権取ったことがないせいなのと、もう一つ、実はですね、民間も含めて組織を

動かしたり、組織の中で様々な形で経験を積んだ方が非常に少ないのが民主党政権です。例えば松下政経塾から真っ直ぐいくと、これは組織でも何でもありません。あるいは、いろんな意味でサラリーマンを長くやって、上司から使われたとかね、そういう方が非常に少ないんですね、どちらかというと。組織とあまり関係ない、組織じゃなくて一人でやる、そういうことの方々が非常に多かった。ですから、やはりこの日本の政府という大組織を動かすための経験といいますかね、これ政治だけじゃなく一般的な経験とやはりその知識というものは非常に欠けていたと。ですから党内のまとまりがなかったと。ですから、その点については我々も結構振り回されたというところがあります。ただ、個人個人の議員の方々は、私はそれぞれね、中にはそのパッパッ変わってどうかなど。今回も離党して、二、三日前までね一生懸命自民党のことを責めておいて、自民党に入るなんてね、ようやるわなと思うんだけど、ただ、個人個人は、大半の方々は非常に付き合いやすい、県内の若い方も付き合いやすい方が多かったですね。多かったじゃなく多いですね。多かっただって過去形になると困るね、すいません、多いですね、ええ。ただ、それが災いしたという点もありますね。

(幹事社)

では、これで終わります。ありがとうございました。